

当団の楽曲解説は、筆者の独自目線、余談によって執筆しているものであり、「こういう表現もあるな」という温かい目でご一読いただけるとありがたい。しかも、今回は長文です。

1. 喜歌劇『こうもり』序曲(ヨハン・シュトラウスⅡ)

ヨハン・シュトラウスⅡ (Johann Strauss(Sohn)1825 ~ 1899)は、「ワルツ王」という呼称で親しまれている、オーストリアの作曲家・指揮者で、彼の代表作である『美しく青きドナウ(作品314)』はオーストリアの第二の国歌としても認知され、毎年1月1日に行われるウィーン・フィルのニューイヤーコンサートにおけるアンコール曲としてもおなじみである。

『こうもり』は、1874年にアン・デア・ウィーン劇場で初演された全3幕のオペレッタである。オペレッタとは、日本では“喜歌劇”と訳され、その大部分の作品は、ドタバタがあった後、ハッピーエンドを迎えるというストーリー展開をもち、誰もが楽しめる舞台芸術である。題名は「こうもり」であるが、動物のこうもり(蝙蝠)を題材にしたものでも、八方美人的な人(コウモリ野郎)を揶揄したものでもない。かつて、銀行家のアイゼンシュタインとその友人のファルケは仮装パーティーに参加した。蝶々に扮したアイゼンシュタインは、こうもりに扮装したファルケを泥酔させた挙句、森の中に置き去りにした。昼に目覚めたファルケがこうもりの格好のまま街中を歩き回り、「こうもり博士だ!」と笑いものにされたことから、その仕返しとしてアイゼンシュタインに仕掛けた“こうもり博士の復讐劇”が、この喜歌劇の台本である。“復讐劇”とはいえ、劇中に登場する音楽は、ウィнна・ワルツやポルカにあふれ、まるで劇場版ニューイヤーコンサートと言えるかもしれない。実際、ウィーンにおいては、元日のニューイヤーコンサートの前日(大晦日)に、この喜歌劇「こうもり」が国立歌劇場で上演されるのも恒例となっている。

さて、あらすじであるが、先にも述べたとおりドタバタが多く、話が複雑に展開するので、骨子となる部分に、序曲の中に採り入れられた劇中のメロディーに対応する部分を肉付けして“超簡単あらすじ”としてお示しする。

超簡単あらすじに登場するのは、アイゼンシュタイン(銀行家)、ロザリンデ(その妻)、アルフレート(テノール歌手で、ロザリンデの元カレ)、ファルケ(アイゼンシュタインの悪友)、オルロフスキ(ロシア出身の公爵)である。なお、アデーレ(小間使い)も大変重要な人物ではあるが、なぜかその素敵なお歌の数が序曲に採用されていないため、超簡単あらすじにおいては割愛せざるを得なかったことをご承知おきください。

第1幕(アイゼンシュタイン邸)

アイゼンシュタインはお役人さんを小突いたことから刑務所に収監されることになっている。その収監の日、ファルケがやってきて「収監は明日の早朝で大丈夫だから、オルロフスキ邸の夜会に参加して羽目を外そう!」と持ち掛ける。アイゼンシュタインもすっかりその気になるがロザリンデには内緒にしておきたい。

ロザリンデが「私はひとりぼっち」と嘆いても、アイゼンシュタインは若い踊り子たちの集まる夜会へのワクワクが抑えきれない(第13場)。

アイゼンシュタインが刑務所…ではなくオルロフスキ邸に向かうと、一人ぼっちとなったロザリンデのもとにアルフレートが忍び込んでくる。大胆にもアイゼンシュタインのガウンを身にまといつろいでいるところへ、刑務所長(フランク)がやって来る。そして、この邸宅の主人(アイゼンシュタイン)であると勘違いされたアルフレートは刑務所に連行されてしまうのであった。

第2幕(オルロフスキ邸の大広間)

アイゼンシュタインが懐中時計を”武器“にご婦人方を誘惑していると、仮面で顔を隠したハンガリーの貴婦人が現れる(これはロザリンデが変装したもので、彼女もファルケに招待されたのであった)。そう、この夜会自体が、ファルケがアイゼンシュタインに仕掛けたもので、ご当人以外は仕掛け人という、TBSテレビの”モニタリング“的な大掛かりなものなのである。案の定、自分の妻とは気づかずに仮面姿のロザリンデに言い寄るアイゼンシュタインであるが、彼女に懐中時計を奪われてしまう。

“みんな、兄弟姉妹だ!”と仲良くなったところで、オルロフスキが「さあ、みんなでワルツを踊ろう!」と提案し、一同盛り上がる(最終場前半)。宴もたけなわとなっているところに鐘が6回響き渡る(最終場後半)。アイゼンシュタインは「私に帽子を!」と叫び、慌てて刑務所へ向かった。

第3幕(刑務所)

アイゼンシュタインが刑務所に到着すると、「アイゼンシュタイン様はすでに収監されています。」と告げられる。見ると、若い男(アルフレート)が収監されており、そこに仮面を外したロザリンデが現れる。不審に思ったアイゼンシュタインは弁護士に変装して、ロザリンデから事情を聞き出す(第11場前半)。ロザリンデが男を家に招き入れたと思い込んだアイゼンシュタインは激高し、「私が本物のアイゼンシュタインだ!」と変装を解き、ロザリンデに不貞を問い詰める(第11場後半)。

しかし、ロザリンデは、夜会で手に入れた懐中時計を取り出し、アイゼンシュタインに逆襲し、結果、アイゼンシュタインが平謝りするという事となった。そこにファルケが、“仕掛け人たちを連れて現れ、ネタ晴らしが行われた(最終場)。こうもり博士の復讐劇は「すべて、シャンパンのせいだ!(^^)」ということになり、一同、乾杯の歌で盛り上がり、無事ハッピーエンドを迎えて幕となる。

さて、“超簡単”と言いながらも簡潔に述べるのが難しく、長文となってしまったが、次に、序曲について、その特徴を解説する(さらに長文になるが、お付き合い願いたい)。

この序曲の構成は、「導入部」、「主部(主題A及びB)－中間部－主部の再現」及び「終結部(コーダ)」となっていることから、複合3部形式であるといえる。

導入部では冒頭の導入主題のあと、ファゴットとヴィオラのリズムに乗せてオーボエが“私が本物の

アイゼンシュタイン(第3幕第11場後半、譜例1)”を奏でる。再び導入主題が現れると、鐘が6回連打される(第2幕最終場後半)。続いてチェロのピッツィカートに乗せて“すべてを話して(第3幕第11場前半、譜例2)”をヴァイオリンが奏で、リズム的な全奏のつながりを経て、曲は主部に移行する。

主部の主題のうち、主題Aは、第1ヴァイオリンが奏でる“これが、こうもりの復讐劇なのさ(第3幕最終場、譜例3)”である。一方、主題Bは、この序曲のメインともいえるワルツ(第2幕最終場前半、譜例4)である。中間部は、第1幕第13場と対応しており、ロザリンデの「私はひとり」という哀愁のある旋律(譜例5)と、アイゼンシュタインの夜会への期待が抑えきれない様子(譜例6)の対比が面白い。その後、主部の再現に続けて、導入部や中間部の一部までも再現したのち、終結部に移行する。テンポを上げて、これから始まる喜歌劇への期待を盛り上げて序曲を閉じる。



2. 組曲第4番「絵のような風景」(マスネ)

ヴァイオリンが奏でる甘美なメロディーで有名な『タイスの瞑想曲』については、「タイス」が作曲者の名前だと思っていらっしゃる方も多いのではないだろうか。作曲したのはマスネ(Jules Massenet 1842~1912)である。マスネは、フランスの作曲家であり、その作曲活動はオペラが中心であった。先の「タイス」はその30曲近いオペラ作品の一つの題名で、「瞑想曲」はその幕間に演奏される間奏曲である。しかし

その瞑想曲以外では、マスネの作品に触れることは少ないが、『絵のような風景』は、演奏会でしばしば取り上げられる貴重な作品である。マスネは、管弦楽のための組曲を7曲残したが、この『絵のような風景』は、第4作目にあたり、4つの小品で構成されている。初演は1873年であった。

第1曲 行進曲

行進曲とは言っても兵隊さんや象さんなどの重々しい行進ではなく、子供たちがおもちゃのラッパを吹きながら行進している微笑ましい、風景というよりは情景が思い浮かぶ。チャイコフスキのバレエ『くるみ割り人形』の“行進曲”にも通じるような嬉々とした様子である。

第2曲 バレエの調べ

ほぼ全曲にわたって、チェロが優雅なメロディーを奏でる。バレリーナが、舞台上でスポットライトを浴びているというよりは、舞台裏や稽古場、つまり、フランス印象派の画家ドガが描いた踊り子たちとして描かれたような曲想である。

第3曲 お告げの祈り

お告げの祈りとは、マリア様の受胎告知を祝い、感謝するお祈りのことである。その祈りの時刻を伝える教会の鐘をホルンと第2ヴァイオリン、チェロのピッツィカートで表現している。フランスの農民画家ミレーの代表作『晩鐘(お告げの祈り)』にも表現されているような素朴な風景が思い浮かぶ。

第4曲 ジプシーの祭(ボヘミアン・パーティー)

ボヘミアンとは、元来、ボヘミア出身と思しきジプシーのことである。あの“カルメン”がオペラの劇中で歌う曲の題名も『ボヘミアの歌』である。金管楽器のファンファーレに導かれて、舞曲となるが、ポロネーズ風な音楽である。このように華やかであるが、決して乱暴ではない音楽が、マスネの魅力である。

3. 交響曲第1番 ハ短調 作品68(ブラームス)

ブラームス(Johannes Brahms 1833~1897)は、ハンブルクで生まれた、バッハやベートーヴェンとともに「ドイツ3大B」と称されるドイツ屈指の作曲家である。

ブラームスが交響曲の作曲を着想したのは22歳(1855年)頃とされ、曲を完成させ初演が行われる(1876年)までに、実に20年以上の歳月を費やした。この間、チャイコフスキやボロディンといったロシアなどの作曲家が次々と交響曲の作曲に取り掛かり、発表を行ったが、メンデルスゾーンやシューマンといったドイツの作曲家はすでに交響曲の作曲ばかりかその人生さえも終えていた。それだけに、ブラームスの作曲する交響曲は、「ドイツの交響曲」として大いに待ち望まれたものであっただろう。

ブラームスは、交響曲の作曲においてベートーヴェンの後継者と目され、この交響曲第1番は「ベートーヴェンの第10交響曲」と言われることもある。実際、この曲にはベートーヴェンの代表的な交響曲の

第2楽章 Andante sostenuto ホ長調 4分の3拍子

この楽章は、「主部」-「中間部」-「主部の再現」の構成となっているが、主部に主題が2つあることから、複合3部形式と考えられる。

主部冒頭の第1ヴァイオリンによる主題Aの先頭2小節の音の並びは、この交響曲と同じく作品68である田園交響曲(ベートーヴェン)の第1楽章の第1主題モチーフと相容れるものがあるのだと、筆者が若い頃に、今は亡き師匠から指南を受けた。



曲が落ち着きを見せると、オーボエが主題Bを奏でる。



第1ヴァイオリンが主題Aの結尾の旋律で締めると、続けて弦楽器によるリズムックな分散和音で始まる経過句を経て、中間部に移行する。中間部は、弦楽器のシンコペーションのリズムを従えてオーボエのちにクラリネットが旋律を奏でる。主部再現部は、チェロの3連符のピッツィカートに乗って木管楽器が主題Aを奏でる。この部分はとかくヴァイオリンが奏でる高音の8分音符の動きに注目してしまうが、主題を再現しているのは木管楽器なのである。また、主題Bの再現については、ヴァイオリンの独奏で開始したのち、自由に展開して楽章を締めくくる。

第3楽章 Un poco allegretto e grazioso 変イ長調 4分の2拍子

構成は、第2楽章と同様、複合3部形式である。

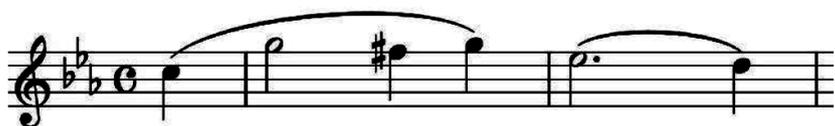
主部の主題Aは、冒頭からクラリネットによって歌われる、平穏で優雅な(grazioso)な旋律である。一方、主題Bは弦楽器同士の掛け合いの刻みに乗せて、急かされるような旋律となっている。中間部は、ロ長調(8分の6拍子)に転じており、「トリオ」的な要素となっている。

この楽章の位置づけは、古典的なメヌエットやスケルツォといった舞曲的なものではなく、間奏曲的なものだろうか。主題Aのモチーフは、第4楽章の序奏Bの旋律(後述)の暗示にも思えるし、指揮者によっては切れ目なく第4楽章に移行する場合もある。

第4楽章 Adagio (序奏A部) — Più andante (序奏B部) — Allegro non troppo, ma con brio ハ長調 4分の4拍子

この楽章は、2部構成の序奏を持つ、変則的なソナタ形式である。

ハ短調の序奏A部では、中低音弦楽器の下降音型で重々しく開始されると、ヴァイオリンの高音の旋律を奏でる。



これは、第1主題のモチーフとなるものである。その後、曲想は葛藤の様相を帯びるが、それに終止符を打つかのようにティンパニが轟くと、ハ長調の序奏B部となる。ここは一転して朗らかなアルペンホルン的な旋律である。



なお、この旋律は、ブラームスが1868年にクララ・シューマンに贈った、愛に満ちた旋律らしい。途中、トロンボーン等の讚美歌にも似た、ゆったりとしたファンファーレを挟んで、提示部へと移行する。提示部の第1主題は、弦楽器群によって喜びに満ちたように歌われる。実際、このメロディーは、交響曲第9番(ベートーヴェン作曲、いわゆる第九)の第4楽章の主題、いわゆる「歓喜の歌」を彷彿とさせる。



木管楽器によって主題が確保されると、歓喜に沸き返るような経過句を迎える。それをなだめるようにフルートとホルンが序奏B部の主題を短く奏でると、それに応えるように、低音弦楽器による下降音型のオスティナート(1つの音型の繰り返し)に乗せてヴァイオリンが第2主題を提示する。



オーボエの副旋律の後、ヴィオラがうごめき出す。楽理上は、ここからが小結尾(コデッタ)となり、旋律と伴奏とを交互に役割分担してきたオーケストラが4分音符の動きに統一されると、3小節間の和声展開の“つなぎ”の後、曲は再現部に移行する。



もうお気づきのこととは思いますが、この楽章には明確な展開部が存在しない。このことがこの楽章の冒頭に申し上げた“変則的”ということなのである。とはいえ、この再現部は、その第1主題の再現において、序奏A部における弦楽器のピッツィカートや序奏B部のモチーフを取り入れるなどして、展開を試みているのである。

再現部が終わると、低音楽器と木管楽器によって第1主題のモチーフをカノン風に掛け合い、そしてテンポを上げながら気分を高揚させたまま終結部に移行する。終結部は第1主題のモチーフを基にした新たな音型を展開させ、途中で序奏B部のファンファーレを高らかに歌い上げるなどして全体を締めくくる。最後は、ハ長調の主和音(ド・ミ・ソ)を連呼しており、ここにも作曲者の「運命交響曲」への、ひいては、ベートーヴェン自身へのオマージュが感じられる。

以上